会見内容

午後１時30分　開始

【広報広聴課長】　それでは、定例記者会見を始めます。

それでは、市長からごあいさつをお願いします。

【市長】　新年明けましておめでとうございます。昨年は大変お世話になりまして、ありがとうございました。

おかげさまで昨年も良いプロジェクトが完成をしたこともたくさんございましたし、大みそかはいいお天気で、またお正月３日間、今日もいいお天気で迎えられまして、今年も良いことがあるのではないかという期待の中で新年を迎えたところでございます。

しかし、まだまだ多くの課題が残っておりますので、今年も元気いっぱい、力いっぱいその課題解決に向けて頑張っていきたい。このように心新たにいたしているところでございます。

【広報広聴課長】　今回は、市から特に案件の発表というものはございませんので、これから質疑応答に入りたいと思います。

まず幹事社の方からお願いいたします。

【記者】　今年もよろしくお願いします。

先ほど午前中に、原子力機構の敦賀本部長に新しく就任された早瀬さんがあいさつに来られたのではないかと思いますけれども、お会いになられての感想、印象とか、今年１年もんじゅイヤーと言われますけれども、機構、敦賀本部に対して望むことなどおありでしたらお聞かせいただきたいと思います。

【市長】　私は本部長と、ちょうど東電さんにいらしたり、また他のところにいらしたものですから、初めてではございませんでした。久しぶりに実はお会いしたんですけれども、新たに原子力研究開発機構の副理事長に就任され、また敦賀の本部長になられたということで、先ほどお会いさせていただいたところでございます。

原子力通でもございますし、ぜひこれから、お話されておりましたけれども、安心、安全というものをまず第一義に、今の時代、特に環境問題の中で原子力というものが世界的にも注目されておりますし、特に機構さんにおかれましては、ふげん。ふげんは特に廃炉研究というものもございます。それと、もんじゅにつきましても、まだまだ課題はあるかもしれませんけれども、やはり新しいタイプの原子炉でありますし、燃料が増えていくという観点から考えますと、エネルギー資源が枯渇をいずれはするであろうという時代に向けて、すばらしい研究ができる一つの施設だというふうに私は思っておりますが、そのもんじゅに対してもぜひ真剣に取り組んでいきたいというお話をいただいたところであります。

まだまだ運転再開等々につきましては議論するところもありますよというお話をさせていただきながら、私どもは原子力があって良かったなと言われる地域づくりも目指しておりますので、いろんな観点からお力添えを賜りたいというようなお話をいたしておりまして、もちろん原子力等についても大変詳しい方でありますので、ぜひ本部長として、今まで恐らく地元対策はあったのかなかったのか、ちょっと私もそれは分からないんですけれども、そういう点ではぜひやはり地元に張りついていただいて、原子力と地元立地地域との共存共栄をどのように図られるのかというところで、ぜひご尽力をいただきたいなと。そういうことをお話もしましたし、感じました。

【記者】　前に出馬表明をされたときに、もんじゅ運転再開の判断について、国が原子力立地地域をどの程度思ってくれているのかというところが一つの判断基準になるというようなお話をされていたんですけれども、具体的に何かそういうお考えはあるんですか。

【市長】　私どもも、国に対しましていろんなことを今も全原協という立場の中で要望をいたしておりますので、そういう中で要望させていただいているところで、こういうことも考えているというようなお話も詰めていきたいというふうに思っておりますし、判断基準といいますのは恐らく何かいろんなお話では、何かを入れるやつがちょっと遅れて５月ぐらいに工事が完了ということになりますので。

そうなりますと選挙が終わってからの判断になると思いますが、それは私がなってませんからしょうがないもので、それは何とも分からないんですけれども、やはりまず安全であるということの最終確認をして、それから地域振興なりという話はしたいなと思っています。

【記者】　例えば今、固定資産税の話を全原協の会長として要望されていますけれども、

あれとの綱引きという形になってくるのか。
【市長】　固定資産のやつは、もう大体解決しました。
【記者】　解決したんですか。
【市長】　はい。何とか頑張りまして残るようになりましたので。
【記者】　前回の市長選のときは、敦賀３・４号機の増設のことが争点の一つであったかと思いますけれども、今回の場合は、もんじゅの運転再開に関してどういうふうなスタンスであるというふうに市民に訴えていくおつもりですか。
【市長】　ちょっと先ほどと重なるかもしれませんけれども、まず安全、安心というものを主眼に置いて、それと国に対するいろんな地域に対する地域振興のいろんな声を聞いて判断をしたいと思っています。
【記者】　聞いて判断するという姿勢ですということを市民の方に選挙戦で訴えていかれるということですか。
【市長】　そうです。基本的には、原子力と共存共栄しようというスタンスは変わりませんから。
【記者】　運転再開ありきというわけでもない。
【市長】　そうです。
【記者】　まず安全、安心の確認があって、その次に、地域振興に対してどれぐらい国がちゃんと、言い方は悪いかもしれませんが面倒を見てくれるのかというようなところをちゃんと見極めた上でそこは判断しますというお立場であるということを訴えられるということですか。
【市長】　はい。そういうことができるのは私だけだと。
【記者】　ということを訴えていかれる。
【市長】　はい。私に任せてくださいというようなスタンスでいくと思います。
【記者】　それは、この前の出馬表明のときにおっしゃっていたような、長い間に培ってきたパイプとかそういったことを含めて。
【市長】　そうですね。おかげさまで、そういう位置にようやく今なりつつあるかなと思っていますので。それをフルに活用して地域の発展のために頑張りたい。
【記者】　運転再開にしても、地域に一番良い形でと。
【市長】　はい。
【記者】　先ほどの早瀬本部長とのやりとりの中で、運転再開に関しては議論するところもありますよという形で伝えたということですか。
【市長】　そうです。だから、終わりましたので、はいどうぞということはないということだけは。それは前からお伝えしてございます。
【記者】　具体的に、それ以上の中身については。
【市長】　まだ話していません。
【記者】　そういう留保をつけたというか、まだこれからですよと。
【市長】　そうですね。まず安全なやつをちゃんと報告を聞いて、次の階段を上がるときにそれをしたいと思います。
【記者】　次の階段というのは、具体的に今やっている安全の確認試験を全部終えた次の段階ですか。
【市長】　はい。その後の階段を上がるときです。
【記者】　立地地域との共存共栄にご尽力いただきたい、具体的なその地域振興の話をそれから安全確認の後にしていくという話ですけれども、その中には例えば新幹線の話であるとか、そういうような話も含まれるのでしょうか。
【市長】　新幹線につきましては、ちょっとまた違いますけれども、いろいろあります。
【記者】　例えば、河瀬さんが考えている地域振興として期待しているものとしては。
【市長】　やはり私ども一番思っていますのは、発電所もあるし、これはエネルギー拠点化計画と重複すると思うんですけれども、私どもはやはりエネルギーのいろんな発信をしたり研究をしたりする一つの拠点をつくりたいんです。そういう中に機構さんも非常に大きなウエートを占めますので、そういう面に対する協力もそうでしょうし、また目に見える形で、これは国の方になると思いますけれども立地地域の皆さん方がもっとあってよかったなと思われる政策、例えば具体的にいいますと、これができなくては判断云々というところまではいきませんが、例えば電気料金、一番やっぱり声が多いのは電気料金の割引が一番良いよという声が多いんですね。市民の皆さん方、一番実感ありますから。そうい

うものの拡大がもし図れるものであれ、そういう方向性とか。
　これは全原協の例の要望書の資料を見ると分かるんですけれども、本当に細かくいっぱい実は書いてありまして、その部分で、例えば機構さんが協力できる部分はしてもらうというような形の話になると思います。
【記者】　ちょっと原子力の話から離れますけれども、この前の12月議会の冒頭でおっしゃっていた市立病院の件に関してなんですけれども、あれは増床したけれども結局は医師がいないから閉鎖するという状況になってしまったわけですけれども、そのあたり医師不足もあると思いますけれども、患者もそこまで増床するだけの患者数があったのかということを取材してちょっと疑問に思ったんですが。結構70億円ぐらいかかっているわけで、そのあたりの見込みみたいなものをどうお考えですか。
【市長】　お医者さんが増えれば患者さんも増えますし、これは間違いないと思います。いけると思うんです。ただ、今の閉鎖している病棟についても入れれんことはないんです。入っていただければ、結局サービスの低下。お医者さんが少ない、看護師さんが少ないのに患者さんが増えれば、当然サービスの低下になりますし。そういうことは避けたいということで閉鎖しておりますけれども。
　今、金沢の大学病院、また福井大学の医学部、金沢大学の医学部初めいろんな先生方にお願いをしながら、必ず増えるぞという期待もしながら、また今運動を展開しておりまして、そういう点で少しでも医師不足をまず解消することが病棟の閉鎖の解消にもつながるのではないかと私は思っていますし、そのあたり、ぜひこれからも真剣に取り組んで。せっかくつくった病院であります。
　それと、今まで６床だったんです。どうしても患者さん、入院されている皆さん方にもご不便がありましたので。今は全部４床になってきましたし、そういう面ではゆったりと、きれいなところで療養していただけますので。
　閉鎖されているのは非常に不本意でありますし、これは解消すべき努力はしますが、病院自体は非常に良くなりましたし、また患者さんにとりましても、そういう点では良い病院になったのではないかと思っています。
　ただ、お医者さんが少し足らないという問題点につきましては、現実問題でありますので、これもしっかり解消するように頑張ってまいりたいと思っています。
【記者】　実際に病室を見たんですけれども、１部屋にベッドが４つで本当にゆったりとして、入院するならこういう病院がいいなという印象だったんですが、４床になったところは大体閉鎖の憂き目に遭っているわけです。
　といって、そこが閉鎖になったからといって困っている患者さんがいるわけでもないということで、需要と供給がそもそも両方とも過大だったのではないかという印象を受けるんですけれども。
　でも医師が増えることで患者は増えるというふうに考えていらっしゃるということなんですか。
【市長】　ある程度やはりお医者さん、やはり良いお医者さんを呼ぶことによって患者さんは増えると思いますし、これはまた難しいので、余り病院に人が来てというよりも、例えば、お年寄りでも寝たきりにならないようにしようと。だから健康になっていただければ病院が減ってもやむを得ない。市民の皆さん方が元気でお暮らしいただければ、それにこしたことはないところもありますし。
　でも今のこういう高齢化の中で、そういうことを望みながらも、現実とすればやはり体を悪くされる方もたくさんいらっしゃいますので、そういう点では、例えばよく皆さん、済生会へ行くといいとか。それは役割分担をしていますので、敦賀病院でだめなものは済生会にお世話になったり国立へ行ったり。でも、他のところからも敦賀に来て、敦賀で良くなったという人も実はいっぱいいるんです。ところが、良くなったことは当たり前ですから、だれも褒めてくれませんし、だれも言ってくれんのです。そのうちに１つか２つちょっと悪いことがあると、あの病院は悪いとか言うけれども、本当は圧倒的に、例えば敦賀病院に入院された患者さんの中でよかったなと思っている方が実はいっぱいいるんです。その人たちは口に余り出しませんから話題にはなりませんけれども、そういう点で、敦賀病院が何か物すごく悪い病院みたいに一部報道されますと、本当に悪い病院に思われていますが、そういうことは決してないというふうに私どもも自信を実は持っております。
　そういう点で、お医者さんが増えることによって、ちゃんとした体制で患者さんを診ることができれば、また患者さんも増えると思います。

　ただ、さっきも言ったように患者さんが増えることは好ましくないことなんですけれども、現実問題とすれば、敦賀病院がそういう面で期待される病院になることは大事だと思っています。
【記者】　そういう意味では、70億円かけた第３次の整備事業というのは必要な支出だったというふうにお考えですか。
【市長】　はい、もちろんそう思っています。
【記者】　関連してなんですけれども、お医者さんの人数が増えれば患者さんも行きやすくなるということなんですか。
【市長】　いや、病気というのは数知れずの病気がありますから、その病気に対応できるお医者さんがいれば、あの先生がいるのでということもありますし、結構お医者さんも選ばれる時代になりまして、あの先生ならとかいろんなことがありますので、そういう点で、やはりいいお医者さんに来ていただく。
【記者】　先ほど敦賀病院が自信を持っているということで、例えばその裏づけとなるような、こういったデータがあるとか、そういった根拠となるものはございますか。
　敦賀病院が皆さん１つか２つ悪いことがあると悪いふうにとらえられるけれども、敦賀病院は敦賀病院で来て治った人もいるとかということですが。
【市長】　もちろんいっぱいいます。
【記者】　敦賀病院がいい病院だと、クオリティが高い病院だというふうな形になる、例えばデータであるとか取り組みであるとか、指標となるものはありますか。例えば、セカンドオピニオンはこれだけの率でやっているとか。
【市長】　今ちょっと病院が来ていませんから、一度また次回にでも出せるようにしておきます。
【記者】　敦賀３・４号の交付金の件なんですけれども、たちまち来年度の赤崎の処分場と消防防災館の財源という問題が出てくると思うんですけれども、年末には政府予算案がまとまりましたけれども、それとの絡みで今どういう見通しで、どういうふうに財源を来年度されていこうというふうに考えていらっしゃるんですか。
【市長】　赤崎のやつにつきましては、前倒しして何とかクリアしたいと思っています。
【総務部長】　今市長申しましたように、赤崎の最終処分場につきましては何とか今年度、財源の手当をするように国に要望をしております。見通しとしては、市長ちょっと申し上げましたように明るい見通しだということでございます。
　消防防災館につきましては、これからまだ年度は来年度いっぱいありますから、財源構成だけでございますので、じっくりと財源については考えていきたいと思っています。
【記者】　資源エネルギー庁は、原則として運転開始が遅れるから前倒ししては出さないよという大原則があると思うんですけれども、その原則を崩していっても赤崎は国の方で手当をしてくれるということなんですか。
【総務部長】　基本的には、その基本線は崩さないと。その中でできることを協力しましょうということでございます。余りこれ以上詳しいことは、申し訳ありません。18年度で処理をすると。まだ３月補正もありますし。ということでございます。
　工事もやろうと思えば来年の分も前倒しして今年度内にやれるという見込みもある程度立っておりますので、それに対する手当をエネ庁として前向きに考えていただいているということでございます。
【記者】　消防防災館は、まだ明確な財源のめどがついていないということですけれども、最悪、工事中断ということもシナリオとして考えられると思うんですが、それはないと。
【総務部長】　そういうことは一切ないです。
【記者】　それは一般財源から措置をするということですか。
【総務部長】　基本的には、この後、新当初予算の査定の中で考えていきたいというふうに思っております。財源の構成を。
【記者】　方針としては、どっちの方になりそうなんですか。やっぱり一般財源から充当というか、新たに……。
【総務部長】　当然、市税で見るか起債で見るか。まだ他にも可能性がないことはないですから。
【記者】　市長はいつも事あるごとに原発には依存しない、共存である市政というのを目指されているとおっしゃっていますが、結構こうやって事業者の都合といったら何ですけれども、割と財源に影響してしまうという状況はどうお考えですか。

【市長】　これは共存のうちの一つでありますから。例えば先ほども言ったように、そうなったから防災館は中途でやめるとか、あれはもうできないということはありませんので。あくまでも共存であるというふうに思います。
　依存と共存は難しいところもありますけれども、どうでしょうかね。私は、他に、例えば原子力だけしかない町なら、それは依存ということにもなりましょうけれども、おかげさまでいろんな事業もありますので、その中の一つ、産業の中の一つであるという観点で取り組んでいるつもりです。
【記者】　水産魚市場をつくる公有水面の埋め立てに関してはどうですか。
【総務部長】　財源手当として特別なことをしなければならんというふうにも考えていません。工事は順調に進んでいる。予定どおり進んでいます。
【記者】　この交付金が出ないことによる遅れとか、そういうことは。
【総務部長】　そんなことは一切ありません。
【市長】　ありません。おかげさまで、かなり安く落ちたこともあると思うんですけれども。
【総務部長】　低価格の入札で。
【市長】　低価格で入ったものですから、そういうものでうまくいきそうです。
【記者】　またちょっと原子力の話なんですが、12月に原子力機構がもんじゅの工事確認試験というのを始めまして、いよいよ来年５月には事故を起こしたＣループにナトリウムを充填する。いよいよ運転再開に向けた、運転再開に向けた許可は別の話だという話でしたけれども、実際問題もんじゅで今起きていることは運転の準備の最終段階に迫っているということでしたけれども、改めて原子力機構に言いたいこと。特に、ナトリウムを実際入れて、どんどんぐるぐる回すということでは、またナトリウム漏れという事故も起こらないでもないと。
　きょうの早瀬本部長の会見でも、実際トラブルということは起こり得る、可能性はあるということを言っていましたけれども、そういうことになれば、また敦賀ですごい騒ぎが起こってイメージダウンとかそういうことにつながるかもしれない。
　それについて、どうですか。
【市長】　でも、そういう試験をして取り組みませんことには分かりませんから。今まで安全に対して一生懸命やってきたある程度の成果がどのように出るかということで。本部長の方もあり得るということで、あり得ないということをずっと言ってきて、実はナトリウムの事故があったわけでありますので、恐らく本部長もそういうあたりで、そういう可能性がゼロということはおっしゃらなかったんだと思いますけれども。
　これだけナトリウムが漏れたということになって、世界的な大きな報道になり、また私どもも衝撃を受けた事故を経験してきた動燃、そして引き継いだサイクル、そして原子力機構がやっていきますので、そのあたりは慎重に設計なり良いものができてきたのではないかなと思いますが、私どももその結果を見ないことには、先ほど言いましたように運転再開という議論はできないという話もさせていただいたとおりでありますし。
　やはり原子力機構の方でそれだけの自信を持って試験に取り組むのではないかというふうに私どもは思っておりますけれども、そのことについては見守っていくしかないかなと。危なそうだから注入するのをやめなさいと言いますと、試験はできませんということになりますので。そこはしっかり見守っていくしかないかなと思います。
【記者】　それは安全協定に基づいて、今後とも工事確認試験についても行政としてしっかり監視していくというスタンスを。
【市長】　そうです。それはちゃんとやっていきます。
【記者】　きょうの本部長の会見とか、もんじゅのトラブル事例集とかを見る限り、人は誤り機械は壊れる。トラブルがあるということを前提に、ちょっと態度が変わってきているというふうに思うんですけれども、前のナトリウム事故のときにも市長をされていて、渦中にいらっしゃったと思いますけれども、今、仮にそういう安全上重要ではないけれどもトラブルが頻発した場合に、敦賀の市民の方たちはそういうのを許容できる風土は醸成されているとお考えになりますか。ある程度、客観的にというか、大騒ぎしないといいますか。それは別に安全上重要ではないというトラブルが頻発した場合に。
【市長】　確かにそういう意識になったことは、私はいいことだと思うんです。人間というのは永遠に生きるわけではない。どこかで病気をしたり死んだりしますし、そういう過程を経て一つの人生がありますから。機械についても、できた瞬間からそれが使えなくな

るまで全く何もなしに終わる機械もありましょうけれども、そうでないこともあるのではないかということを想定していくことが、安全に対する意識が私はより高くなると思いますので。そのことについては、いいなというふうに思っております。
　ただ、やはり私どもの気持ちにしますと、敦賀は原子力とともに歩んで、日本原電の１号機からしますと40数年ぐらいのつき合いになりますけれども、しかし安全に対する考え方なり、敦賀ではトラブルの少々あったって構わんよというようなことは私はないと思いますし、それだけ記者の皆さん方もそうでありますけれども市民のお一人お一人の目、また議会もありまして、そのあたりは結構厳しくやっておりますので、極力そういうものはないにこしたことはないというのが私の希望であります。
　また、何かちょこちょこあると、これは必ず報道されますので。実際には確かに安全には全く問題はなくても、イメージが下がるんですね。市民にとって、多少のトラブルがあってもそれは生活に何の影響もないんですけれども、イメージダウンにつながりますし、今、特に私どもも直流化の中で受け皿づくり、観光、いろんなものに力を入れていますけれども、イメージダウンしますと、どうしても人間というのは、別に他にも海もあるし、そこへ行かんでもというようなことに変わりますので、やはり極力、願うればそういうものはゼロであってほしいという気持ちは変わりません。恐らく市民の皆さん方もそういう気持ち、特に観光等、今、直流化で頑張ろうという意識の中にあっては、ない方がありがたい。
　ただ、やる側は、そういうこともあり得るということを十分に理解しながら取り組むということは大事だと思います。
【記者】　新快速の話がちょっと出ましたけれども、新快速のＪＲ西日本への要望をまとめて提出するというお話が11月の会見のときにありましたけれども、もうまとめたでしょうか。
【市長】　はい。一応、12月26日にＪＲ金沢支社の方に行ってまいりまして、支社長、また関係の皆さん方に要望書ということで正式に、時間帯でありますとか議会で出ておりましたお話を要望させていただきました。
　ＪＲ西日本さんの方も結構、観光というもので、敦賀にちょうど快速が通ったので着目もしながら、いろんなことは取り組みたいというお話はしておりましたけれども、やはりダイヤになりますと、いろんな全体の絡みもありますので、直ちに明日からダイヤをこうしましょうということは車両の問題とかいろいろありますので、直ちにはできないけれども、一つの課題としてお話を承っておきますというようなお返事をいただいたところであります。
　反面、観光ということで、もっと今ある時間帯の中で多くの皆さん方に利用していただけるような方策をもっと考えようということは、市行政とか観光協会とかＪＲ西日本などいろんな関係の観光に携わるグループがあるようでありますので、そういう皆さん方とタイアップをして、もっと利用促進ということ。これは当然、利用されればＪＲ自体がもうかることでありますので、会社も考えていますし、反面、敦賀をもうちょっと取り上げてＰＲなどもやりたいということは言っていただきましたけれども、時間帯を直ちに、この時間帯にもう一本増やして今すぐにというお返事はいただけませんでした。課題として考えていくということでありましたけれども。
【記者】　その要望の内容は、具体的に。
【市長】　要望書があるんじゃないか。コピーして渡しましょうか。
【記者】　お願いします。
【市長】　簡単に言いますと、例えば、まず上り方面についてということで、北陸線経由の敦賀発５時41分、６時５分、及び湖西線経由の６時10分の――これは平日の運行でありますけれども――電車以降は10時まで空いています。ぜひ間が長いので、これを何とか増発してほしいというような。
　これは紙を配りますから、メモせんで大丈夫です。
　敦賀発の最終電車が、また湖西線経由だと４時24分、また北陸線が18時55分でありますから、そうなると、お話ししていたんですけれども来ていただいても晩飯も食べれん。やはり晩御飯を食べていただくと、ビールの一杯も飲むし、つまみもとってくれるので結構売り上げが上がるんです。昼飯よりも、皆さん方もそうだと思いますが、夜飯を食うと、どうしても金かさが上がるというような感覚もありますので。それをもうちょっと遅くして、せめて晩御飯を食べていけるような時間帯にというようなことを要望しました。

下り方面、京都、大阪から来る方については、始発が敦賀に10時前、９時51分になっていますから、せめて８時台に第１便が着くようにお願いしたいということ。また、これも最終ですけれども６時半のやつでは通勤なども利便性も保てないということで、せめて７時台に大阪発ぐらいの増発を要望ということで、要望してまいりました。
これは今お配りしますので。
【記者】　それを直接金沢支社長に要望したんですか。
【市長】　そうです。支社長からは、ダイヤ改正については今直ちに金沢支社でこれをやりますという、要するに大阪との関係もありますので、そのあたりも詰めていただくとのお話もありましたし。直ちに増やしましょうという返事はいただけませんでしたけれども、やはりこういう声があるということを。
当然、ＪＲとしても駅でお客さんに聞いていると思うんです。その声の集約という形で要望させていただきましたので、また何らかの形で。
これからもずっと続く事業でありますから、またダイヤ編成のときにそういうものが入ってくるかなという期待もしていますし、また支社の方からぜひまた本社でということがあれば、また本社の方にも出向いていきたいと思っています。
【記者】　直流化に関連して、観光に関してなんですけれども、やっぱり中核になる観光の施設もしくは観光の名所というのが不足しているのではないかというのは取材でよく聞いたんですが、今市長の意中としては、常設展の展示を目指されている人道の港展、もしくは赤レンガ倉庫とか、どういったところを観光の核にしていきたいとお考えですか。
【市長】　そうですね。駅から商店街を歩いて気比神宮があり、商店街の中にアクアトムがあったり、また商店街が連なって港につながっていますので、このラインの中で一番歩く範囲の中で行きやすい突き当たりの場所が港だと思いますので、そういう点では赤レンガとか倉庫群とか。
それと、前も言いましたけれども杉原千畝さんの常設展を目指したいなと。これは夢も一つあるんですけれども、本物のビザが何とか一つ欲しいんです。本物のビザの獲得大作戦を展開しようと。というのは、時間がないんです。要するにビザを持っていらっしゃる方がアメリカに住んでいらしてもかなり高齢でありますので、何とかお願いして一つ本物を入手できないかなという思いで、助役でもだれでもアメリカでも行って、直接お願いするぐらいのことをなるべく早い時期にやりたいなと思っています。
【記者】　以前伺ったときは、たしかアメリカに住んでいらっしゃる女性の方から複製をつくる許可を得ようとしているというお話でした。そうではなくて、やっぱり本物を。
【市長】　できれば本物が欲しいなと。八百津町さんにも行ってきましたけれども、八百津町さんには本物があるんです。前、町長が出してくれて、箱から丁寧に。これが本物の唯一あるビザですというのがあったんですけれども。もちろんそこにはありますけれども、恐らく大体枚数でいくと約4000ぐらい書いたと思うんです。子供がいるものですから人数は6000になっていますけれども、4000枚のビザはあったんです。それがかなりなくなってきていますので、あるやつを一つもしお譲りいただけるようでしたら、それを一つのメーンとして記念館をつくっていきたい。
それと、前にも言いましたけれども、人道の港ということと、前にも言いましたが命の問題、自殺であるとかいろんなことがありますので、そういうものとあわせて、良い展示館なりそういうものが一つの目玉に十分なり得るものかなと思っていますので、そういう努力もしたいと思っています。
【記者】　今おっしゃった話だと、駅から気比神宮を通って、要するに終着点が港であると。常設展は大和田別荘という案も出ているんですが、そのあたりは。
【市長】　それはまたいろんな皆さんのご意見を聞いて。また新たにドンとやりますとお金がかかりますから、なるべくお金のかからないやつでいい方法をと考えますと、大和田別荘のあそこも十分いい場所になりますので。
それほど広さも要りませんし、八百津町も見てきたんですけれども、そんなに大きいものではないんですけれども、やはり良いものが展示してありまして。
そういうところともタイアップして、例えば向こうにあるやつをまたお借りして。今も借りていますけれども、またほかのも借りたり交換をしたり。敦賀の宣伝もして、また八百津町の宣伝もしたりという連携をとりたいと思っています。
【記者】　ビザは、やはり現実的にはただでもらうというわけにはいかないですよね。
【市長】　そうですね。それで予算が要るんでしたら、つけてでも。

【記者】　獲得大作戦とおっしゃっていましたけれども、実際そういうような専従の職員をつけるとか。
【市長】　そうですね。一人獲得するまで帰ってくるなというくらいしなきゃいかんかもしれんですね。
【記者】　そこまで考えているんですか。
【市長】　獲得できないと帰る場所がないというぐらいにハッパかけて行ってもらおうかなという気持ちでもいるんですけれども。
　ワシントンにそういう杉原さんの記念館みたいなものがあるようでして、私も行ってないんですけれども、また暁には一遍行ってこようかなと思っているんですが。そういう向こうに住んでいらっしゃる皆さんで、もし子孫の方でもいいですし子供さんでもいいですし、本人さんに会えれば一番いいですけれども、あれでしたら私直接行ってでも。日本でいう土下座してでも確保したいなと、獲得してきたいという気持ちは持っています。
【記者】　帰れませんよ。
【市長】　自分自身、帰らんぞといって行ってくるんですか。その辺はよく下調べをして。私どもが動くのは、大体可能性があったときしか行けと言いませんので。
【記者】　自転車タクシーなんですけれども、その後どうなったんですか。
【市長】　今、私どもの聞いている話では、申請をして、特区の許可がおり次第運行しようと思っていますけれども。もし可能なら、ルートを変えて、余り危なくない場所の車道ということも。物もありますので、やってやれんことはないかなと思っていますので。またイベントとか、そういうときにはちょっと活用して、将来的にはメーンの商店街のアーケードの下を走って港に行けるように、今手続を踏んでいると思いますけれども。
【記者】　予定では来年度から、初頭からという話だったと思うんですけれども、もう３カ月前ということは時間が余りないと思うんですが。
【市長】　年度内に落ち着くのかね。特区のやつは。
【記者】　デュアル・モード・ビークルも。
【市長】　そうなんです。あれもいろいろ情報は入ってきているんですけれども、今試験するときで、車体がちょっと軽いので、余り軽いと信号が作動せんのですって。レールの上を走った場合は。それの解決に向けてやっていますけれども、これは県がやっていただけると聞いていますので、県の方と調整してそれがうまくいけば、私らは受け入れる体制をするだけだと思っていますけれども。
　軽いのでと。軽ければ、わし乗ったろうかと言うたんですけれども。わし乗ったら重うなって。私が乗らんときに信号が作動せんと、わしはずっと乗ってなあかんようになりますので。
　重いだけなので、その辺は解決はできるかなと思っていますけれども。今、県の方に実はお任せしてありますので。
【記者】　ひげ線を利用するんですか。
【市長】　もちろんそうです。もちろん今の港線を利用してということです。
【記者】　流れで、周遊バスはたしか今年度中だけの試験的な運行だったと思うんですけれども、来年度もほぼ同様なのか。
　あと、利用者とかお店の人に聞くと、１時間に１本というのは非常にきついということなので、その辺の変更というのは何かありますか。
【市長】　今おっしゃっていただいたようなことは、議会でも出ていたのではないかと思いますし、いろんなところとお話聞きまして。それと、土、日、祝日運行ですので、平日の皆さん方は利用できんということもあります。そういうものを踏まえて、結構人気のある、利用されていますから、継続はしていきたいと思っています。
　それと、時間的な配分と、あとはやはり平日を。でも平日はちょっと難しいかなと。採算的にえらいのかなということも考えていますので、そこを一回試験的に、今度は平日を試験的に運行したり、ルートもせめて30分で回れるルートに。例えば左回り、右回りという形で行く方法もありますし。
　場所によっては、滞在がもうちょっと時間あってもいいというところ。例えば30分おきですと、30分でもいいし１時間でもいいし１時間半でもそこに滞在するということが可能になりますので、それも含めて、よくルート的には研究はしていきたいと思います。
　現時点では、結構利用数は多いので、採算的にもそう問題なくやっていますけれども。
【記者】　今の直流化の受け皿づくりの話に絡むと思うんですけれども、来年度から駅周

辺整備の実施設計というんでしょうか、具体的な動きがたしか始まるというふうに記憶しているんですけれども。
　あと、本町通りに当たる８号線の道路利用の協議会か何かありますね。ワークショップの。
【市長】　利用空間の。
【記者】　はい、利用空間の。
　あと、港は港で大和田別荘の横手の空き地の活用策、今、市の方で市民から意見を募集していますけれども。
　あれはそれぞれ別個の事業のようになっていますけれども、一つのまちづくりにつなげるべきではないかと思うんですけれども、その辺は市長どうお考えなんですか。
【市長】　もちろんつながっていくものでありますから。ただ事業として、例えば道路空間については国道が恐らく県道になると思いますし、そういう中でどうしようかということを県も入れたりいろんな形でやっていきますし、駅周辺は駅周辺としてＪＲも含めて、民間も入れてやります。また港は港で、国交省初めいろんな関係。それと、あそこの地面は県の地面でありますので、県との連携をしながらやっていく。
　全く事業的には別の事業ですけれども、もちろん関連のある事業というふうに位置づけていきますし。
　ただ意見的に、空間を利用する、じゃ駅をどうという意見というのはそうリンクしない部分もあると思うんです。空間をどういうふうに利用しようというときに、駅周辺がどうのというやつは。また連携のとれるものはお互いに連携をとりながら、港のあの場所についても、道路空間を利用するのにあそこの空間をどうとなると、また違う部分もありますけれども、もし関連あるようであれば連携をして、遺漏のないようにと議会で言っていますけれども、遺漏のないようにしなくてはならんなというふうに思っています。
　私ども、例えば役所の中だけ見てもいろんな部と関連するんです。土木もあれば商工もあれば産業もありますので。そういうところはしっかり連携をとって、例えばいろんな委員会の配置の中でも、せめて役所の中ではこういう話があった、ここではこういう話が出たというやつで必ず連携をとるようにします。
【記者】　先ほどの自転車タクシーなんかも当初、警察の方が道交法の関係でアーケード街を走ってはあかんとかありましたね。利用空間の整備の中で、その辺のところもまた声が上がれば、新しいスペースをつくって、自転車タクシーをそれこそ走らすスペースができるのではないかと思うんですけれども。
【市長】　おっしゃるとおりです。ただ、私どもの希望でいけば、なぜ商店街にというのは、ブロンズ像なんかを見ながら動く場合に、どうしても国道側は向き的には後ろ向きが多いんです。結構多いと思うんです。前を向いているのが。
　あの像は結構人気があって、いつでも写真を撮ったりしていますので。それを見てもらおうと思うと、あの中が理想かなと。ただ、おっしゃるように専用のそういうものが空間利用、道路利用空間の中でいけば、そこにはほかの車は入りませんので、そこでとまって、おりて見ることも大事。また、自転車もそこはいいよということになれば、その道路自体の利用が非常にいいですから。
　そういうものを考えると、やはり連携が必要であるというご指摘だと思いますので、それも参考にさせていただいて、十分そういうことも道路利用空間に入るかということも、また伝えて検討します。
【記者】　それについては、市の方も国交省とか県のいろんな関係機関ありますけれども、市の方でやはりイニシアチブはとっていくというふうに考えていいですか。
【市長】　もちろんやはり私どもが運行するものですから、私どもの方から法務省なり県なりに、こういうことも考えているということはこちらから動きます。
【記者】　年末に敦賀２号機のデータ改ざん事件というのがありましたけれども、あれは中野企画部長が敦賀支社長を呼んで厳重注意をしたみたいですけれども、市長として改めて。原因とか、まだ途中で、まだ終わってないんですけれども。
【市長】　またちゃんと報告を聞いた後、またお話しするかもしれませんけれども、今やはりそういうものは遺憾であるというふうに思っています。
　温度関係でありますから、適切に管理してほしいのと、また出口が７度Ｃの差の中におさめなあかんので変えたということで、改ざんという人と、補正をしたという微妙なところでありますけれども、私どもはやはり遺憾なことでありますし。

こういうのはちゃんと説明して、ある程度の数字、１度、２度上がれば上がったんですから、正直に報告して、それをまた是正していけば。
あそこに例えば0.1度上がったか0.2度上がったから大変なことになるというのなら別ですけれども、やはりそれはそこにおさめるように努力をするけれども、あったことはちゃんと報告してほしいなというふうに思いますので。
補正なり改ざんというのは絶対良くないと思います。
また、正確な結果が出たときに、また注意なりそういうことは私どもの方からしていきたいと思います。
【記者】　これは市としても、まだ原電に対してはちゃんとした原因調査を求めているんですか。今の現状としては。
【企画部技監】　この問題につきましては、あそこの問題のデータについてはきちっとした報告がありましたけれども、水平展開ですね、ほかの部分の温度計についてはどうかというのは、まだ結果報告はうちの方には来ておりません。
【記者】　市としては立入調査を一回したんですよね。
【企画部技監】　立入調査というよりも、いつもこういう事故とかトラブル、こういうことがありましたら、やはり現場を見るのが第一というのが我々の頭の中にいつもありますので、この問題につきましてもやはり現場でいろんな人のお話とか、いろんな書類なんかを見せてもらってきたというわけであります。
【記者】　これは今は原電からの報告を待っている状況なわけですか。
【企画部技監】　今も申し上げましたけれども、ここの温度計の結果については既に報告がありました。水平展開をまだしている最中でございますので、それが済み次第、日本原電から報告があると思います。
【記者】　１月10日に美浜３号が運転を再開するんですけれども、隣接自治体として、あれだけ大きな事故、最大規模の原子力事故を起こした原子力発電所の運転再開について、市長としてどのようにお考えですか。
【市長】　前もごあいさつに来たときのお話をさせていただいたとおりなんですけれども、やはりご遺族の皆さん方の心境等を考えますと、恐らく私がそういう立場になれば動いてほしくないと思うのが心だと思うんです。しかし、プラントとしてあれだけのものを、事故を起こしましたけれども、それだけエネルギーとして必要な電気も発電をしながらやっていくものでありますので、そういう一定のご理解を得て再開するというのは、私どもも同じ原子力発電所を持っている地域とすれば、ある程度理解もしてやらなければいかんのかなというふうに思っています。
ともかく根底には、ああいう事故を起こしたことを決して忘れることなく、しっかりとした教訓を持って、今後の運転等について万全を期しながらやっていくべきものだというふうに思っています。
【記者】　年末に決まった保育園の民営化の件ですけれども、結局、応募したのは１法人だけだったんですか。
【市長】　はい。
【記者】　これは市の全額出資の法人だったということで。
【市長】　もう私、理事をやめたから分かりません。
【記者】　まず、民営化というふうに本当になるのかなというのと、もう一つ、まだ３つ残っていますね。要するに、敦賀市内に民営化の受け手というのがそもそもいるのかなというところが素朴な疑問なんですけれども、いかがですか。
【市長】　今、社会福祉法人の方で受けていただくということで、いろんな福祉の同じ事業ですから、保育事業も非常に大切であります。障害者の皆さん方もそうでありますけれども、やはり子供たちをしっかり見ていくというのは子育て支援、また少子化対策にもなりますので、ありがたいことだと思います。
ただ、前の例でいきますと、例えば本町保育園がなくなって、民営化とは言いませんけれども民営化に近いですね。さみどり保育園が引き受けていただいた。中郷西も新しいんです、施設が。だから今回の松原保育園にしても、やはり市でできる範囲の中できれいにしていただいて、運営する皆さん方が余り、しばらくしたらまた傷んで負担になるということもありましょうから、ぜひそういうものの。
今回が初めての民営ではありませんけれども、既存の保育園を民営化するという意味では第１号になりますので、そのあたりいろいろと今度引き受けていただける皆さん方とも

その後のケアなり、またよくお話を聞いて、そして第２弾、第３弾を進めていきたいと思います。
　やはり民営化はどうしても必要だと私は思っています。
【記者】　それは財政上の点からということですか。
【市長】　もちろん財政上の点からも大きなものがあるというふうに思います。
【記者】　今の関係で、最初、受託法人に通知して、説明会、11月の終わりでしたか。あのとき私も取材で入っていたんですけれども、あのとき５法人がお話を聞きに来て。
　そのときに、一応保育園事業をやっている法人の代表から、今回、松原保育園の保護者の要望が色濃過ぎると。これは保育園事業をやっていない社会福祉法人にすると、かなりハードルが高いのではないかというふうな意見もあったんです。
　ただ今回の社会福祉事業団は、今ちょっとありましたけれども障害者の施設の運営はやってきていますけれども、全く保育園事業は初めてなわけです。その辺で非常に不安が残るのではないかと思ったんですけれども。
【市長】　大多数といいますか、結構１年間は継続もありますので、今いらっしゃる保育士さんとか関係の皆さん方も入って一緒にやっていきますから、その辺の不安は極めて少ないのかなというふうに思います。
　それと、確かに運営自体は慣れていないということでありますが、社会福祉法人という中で、出資は市100％でつくったところでありますし、うちも保育事業というのはずっとやってきたものであります。そういう連携をとれば、うまく私はやれると思いますし、やると言っていただいたからには、うまくやっていただかなくてはならんと思っています。
【記者】　西川知事が午前中の会見で、今年は新幹線が正念場の年であると。何としても前進させたいということを強く強調しているんですが、これについて、今年は河瀬さんとしては、敦賀市としてはこの新幹線どういうふうに取り組んでいく。今年の１年。
【市長】　私どもは、例えば若狭ルート堅持をして云々というのは、嶺南地域一帯を考えた中で、まだ実は話が見えていないところもあるんです。若狭ルートでも頑張ろうというところもあれば、やはりもっと早くつなげることに意義があるというところもありまして。
　私とすれば、新幹線というのは早くつながることが大事だと思うんです。若狭ルートについては、当然やはり将来的な構想として日本海側をずっと抜ける新幹線をつくるという構想を決して忘れることなく、新たな展開として私は進めればいいと思うんですけれども、やはりまず当面、福井の駅が工事にかかっていますし、まず敦賀まで認可申請しましたから、敦賀までの認可申請をしっかり受けて、敦賀までの工事が始まる、恐らくまだちょっと時間があると思いますけれども、やはり基本的には米原につないでいくか、まずそういうことに動かざるを得んのかなというふうに思いますけれども。
　これは最終的には西川さんが判断していただいて、決めたことは私は異議はないと思っています。
【記者】　まず米原につなぐ。
【市長】　米原につなぐのが一番早くつながるのではないか。ただ、これも滋賀県さんがどう言うか分からないところもありますし。若狭ルートですと、京都の亀岡を抜けていったのでは非常にまたこれもお金が莫大にかかりますし、向こうの理解もあります。
　その辺あたりで、知事の立場の中で滋賀県の知事なり京都府の皆さん方としっかり話し合いをして決めていただければ。
　敦賀は、どうしても通ってもらわなあかんというスタンスは貫き通したいと思います。
　私自身が、こっちがいいとかあっちがいいと言うのは差し控えたいと思います。
【記者】　敦賀を通った後、米原につないだらいい、早くつながることが大事だということは、いろいろ関係、例えば県とか……。
【市長】　いや、まだ話していません。私が勝手に、早くつながった方がいいなと思うだけです。最終的には、これは県のスタンスで判断していただければいいと思います。県として若狭ルートだといえば、それでも結構でございますし、米原へ行く、これも結構でございますので。私は、あっちがいい、こっちがいいというのは言いません。
【記者】　早くつながることが大事だと。
【市長】　と私は思っています。私自身とすれば、早くつながるというのが大事かなと思います。中途で切れていたのでは余り新幹線の意味がないと思いますので。
　敦賀でとまるということもあるかもしれませんけれども、それでもしばらくはしようがないかなと思っているんですけれども。東京から敦賀行きという新幹線が出ます。

【記者】　最近、湖西ルートで大阪へとかいうアイデアを。
【市長】　そうです。あれはフリーゲージなりトンネルなり。あそこは風に弱いでしょう、湖西線というのは。新幹線が風吹くたびにとまっているようでは、新幹線の値打ちがないかなと思ってみたりしまして。
　一時、フリーゲージのタイプ、レールを３本置いていくタイプなども考えられたみたいですけれども。実際、湖西線は全部高架ですから、新幹線は変わらんように走れることは走れるんですけれども、風に弱いかなと。よっぽど風除けとかそういう対策をすれば、また不可能ではないと思うんですけれども。
【記者】　それには金がかかると。
【市長】　と思います。恐らく。
【記者】　いろんな現実的な条件で、米原につなぐのが一番やりやすいのではないかと。
【市長】　ただ、それも滋賀県さんがどう言うかなというところがありますけれども。
　ちょっと先の話なので。私どもとすれば、ともかく敦賀までしっかり引っ張ってくるというのを第一使命として頑張ります。
【記者】　市制70周年につきましては。
【市長】　市制も70年をちょうど迎えましたので。ただ、こういう御時世でありますので、まだ70ですから、余り派手にせずに粛々と簡単にと思っています。100年といいますと、またダーッとやりますけれども。30年後ですし、だれもここにおらんのじゃないですか。
　それと、１点ちょっとまた誤解があるといけませんので。
　中日新聞さんでいろいろ多選を批判したと書いてありますが、実はしてないんです。私は、選挙に出るときに43だったんです。高木さんは75だったんです。若い者にかわりましょうと言ったんです。なぜ批判せんかというと、必ず批判すれば自分に返ってくるということを気づいていました。実はあの時分にもう既に。
　先のことは分かりませんので、分からないことに対して、後からああ言っていたでしょうと言われるのが嫌だというのは分かっていたんです。だから、それはどの場所であっても、どのマイクを握っても、もう若い者にかわりましょうという選挙戦を実はしています。これは恐らく当時の新聞等を見ていただければ分かると思いますけれども。
　私は、長いから悪くて短いから良いということはないと思いますし、場所によっては10期やった市長も実はおりますし、岸和田は８期やった。今、金沢の市長さんも５期目になりましたし。悪いことをする人は１期でもしますし、せん人は10期でもしませんし。だから、なぜ長くすると批判。
　確かに飽きるということはあるんです。飽きたと。でも私は、人の飽きたとか飽かんでこの仕事をしているわけではない。やっぱりまちを一生懸命やろうという自分の信念で目指しますので。それも悪いといえば悪い。
　ただ、多いと悪いというのが私自身はちょっと理解ができないところが実はありまして、そういう点で。でも世間一般では多選批判という言葉が四文字熟語になっているようでありますので、これは仕方ないんですけれども。前の高木さんは５期目でしたし。私は今度４期目ですから。これが５と５ですと、また言われる可能性もありますけれども。
　今の記憶にある限り、もうやめてくださいとか、こんな長くやってやめてくださいと言った覚えは一切なしに、若い者にかわりましょうということで言ったのだけ。
　当時を知らんと思いますので、それだけひとつご理解をいただきたいと思います。
【記者】　覚えていますよ、私は。当時私はいましたから。
【市長】　そう言うておったでしょう。
【広報広聴課長】　残り時間が少のうございますので質問を絞りたいと思いますけれども、最後に１問ということで、どなたかいらっしゃいますでしょうか。
【市長】　まだ４月もあるんですか。
【広報広聴課長】　４月も予定しています。
【市長】　４月、まだ選挙前にあるね。そのとき、またそんな話をしましょう。
【広報広聴課長】　それでは、よろしゅうございますか。
　では、これで定例記者会見を終わります。
【市長】　ありがとうございました。また今年もよろしくお願いします。

午後２時30分　終了